



ジェネレーションギャップ

親子と同じです(いえ以上かも)。私(わたくし)と若い教員の年齢差。だから話が合わないのは当たり前? 仕事の上では彼ら彼女らの職業意識で私との会話が成立していますが、こと流行や趣味、笑いのツボに関しては、ずれている気がしてなりません。いえ、ずれていて当たり前でしょう。いわゆるジェネレーションギャップというやつです。

No Image

今の教員の年齢構成は、どこの学校でもアンバランスになっていて、ベテランか若手かのどちらかで30、40歳代が少ない状態がこれからしばらく続きます。会社や工場、お店や職人さんの場合、先輩や上司、親方に付いて少しずつ学んでいきますが、教師は、すぐ一人で授業や担任をしなければならないので大変です。それは子どもや保護者の方も同じで、期待と不安が入り混じった始業式が毎年あるわけです。もちろん、若い人たちを育成していくシステムは以前から存在し、和歌山市では教育研究所が研修会を、学校では拠点校指導員、校内指導員を中心に指導を行っています。

「熱心な先生」と「いい先生」の違いは何でしょう。一日の大半を仕事に費やし、その努力がノートやプリント、連絡帳などを通して保護者に伝わっている人が「熱心な先生」。しかし、「いい先生」となると話がちがいます。子どもや保護者の主観、あるいは思いや願い、もっと平たく言うと好き嫌いの部分になってきますから。その人のセンスの部分になってきますから。努力の部分は本人のやる気と責任感の問題。工夫と技能の部分は経験の問題。では、センスの部分はどうなのでしょう。

No Image

学級経営のキモ、事務処理のノウハウ、授業力の向上、児童の生活指導、保護者の対応、職場の人間関係などなど、若い教員が研修や講義、本から学べることはともかく、そうでない部分は、ベテランが態度や姿勢で、言い換えれば背中教えなければ伝わらないのかもしれないかもしれません。そしてそんなとき、ジェネレーションギャップなんて関係ないと思うのですが。